# 「おもてなし」は土産品で

山形県観光土産品公正取引協議会会長
長谷川　正芳

いよいよ来月から山形はビッグイベントシーズンに入ります。東北六魂祭、ASPAC、山形DC、山形花笠まつり等々。事務局等は受け入れ態勢に大車輪で奮闘中と拝察しますが、私たち土産品を提供している者にとっても山形の逸品をアピールする絶好の舞台です。

この機会に私たちの組織であります山形県観光土産品公正取引協議会について紹介いたします。設立されたのは1995（平成３）年。全国組織の１つとして県菓子工業組合、県製麺協同組合、県漬物協同組合の３団体が中心となって立ち上げました。公正取引の名の通り、事務局を山形県商工会議所連合会内において「不当表示」「過大包装」の防止と「食の安全・安心」を推進するため、業界自らが調査・指導・監督を行い消費者の信頼を損なわないようにしよう、という目的です。初代会長は（株）でん六の鈴木傳四郎氏、２代目が（株）杵屋本店の菅野俊夫氏で、私は2007年から３代目会長職を務めさせていただいております。

協議会の活動を通じて全国各地の同業の方々の知遇の得ておりますが、業界の健全な発展を図るという本来の目的と同時に、土産品の充実は観光振興、地域発展の重要なファクターである、ということあらためて痛感しています。感銘を受けたのは金沢の取り組みです。昨年、金沢市で開かれた協議会の全国大会に参加しましたが、『金沢の気骨』の著者である前金沢市長山出保氏の20年にわたる街づくりが今開花して、行政と民間が一体となって「観光立国」を統一テーマに、それぞれの役割を果たしておりました。例えばインターネット市場「金沢屋」。石川県の名産品・特産品の逸品を集めたサイトで和菓子、洋菓子、魚・加工品等々あらゆる種類の土産品が品揃いしています。今では当たり前となったインターネット市場ですが、それを20年前に始めているのです。加賀百万石の歴史と文化に対する誇りが根底にあるのは言うまでもありませんが、「観光を充実させなければ、生き残ることができない」という業界の強い意志がひしひしと伝わってきました。

私たちも負けてはいられません。まず１つには、山形県はじめ各自治体が推進している農業の６次産品化への対応です。菓子類、漬物、麺類等々土産品において、個々の業者が競い合って強力に推し進めブランド化することです。次に県外に積極的に売って出ることです。特筆すべき例が横浜高島屋での「紅花の山形路物産と観光展」です。2002（平成14）年、当時の山形市長吉村和夫氏の後押しを受けて山形市、山形の観光と物産展実行委員会、紅花の山形路物産振興会が主体となりスタート。平成23年の第10回記念展においては７日間で１億８千万円の売り上げを記録しました。官民一丸となって山形を売り込む成功事例ではないかと、思っている次第です。私は業者で構成する振興会の事務局長としてイベントに関わっておりますが、東北芸術工科大学の学生にポスター等のデザインを考えてもらったところ、その斬新さに目を見張りました。開学から20数年、優秀な人材が学び、山形で起業しさまざまなアイデアと実行力で地域に貢献しています。それを活かさなければなりません。若い人たちの感性を大事に育てるのも私たちの役割である、と実感しました。

土産品は「おもてなしの最大の表現」です。ビッグイベントを機に充実、発展に向けて多くの方々と共に模索していきたいと思っています。

（株）長榮堂取締役会長

（代々伝わる店舗内の雛飾りの前にて撮影）